
依童 / YORIWARA (セラフィム・スパイラル 諒×暁人)

黒狐由意

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

依童/YORIWARA（セラフィム・スパイラル 諒×暁人）

【Nコード】

N7181D

【作者名】

黒狐由意

【あらすじ】

BLゲーム・セラフィム・スパイラルの諒×暁人BADEND後を書いたファンノベルです。（始祖×暁人）

満月が過ぎ、暗い夜が多くなった。

暁人は1人、マンションから月の見えない夜空を眺めた。

明かりをつけないままの部屋の向こう、戸口で錠を回す音がして、誰かが帰ってきた。

また今日も遅い。幽かな血の香り、そして、人の気配。

「お帰り。遅かったね」

暁人は振り向きながら言った。

答はなく、暗いままの部屋で暁人の身体に回される腕。そして今はもう嗅ぎ慣れてしまった香り。

暁人の唇にからむ唇。そして入ってくる舌。

絡み付くような接触。

ずっと貪っていた筈なのに、帰ってくるとまたこうだ。

暁人の首筋を這う唇。差し込まれる牙。

「っ……！」

痛みと熱。

相手は暁人の血管から吸い上げる。

こうされると暁人は何も出来なかった。首が熱くなり、頭がぼうつとしてくる。

なんだかどうでもよくなって力が抜けていく。

気がつくと思がされていて下の方も貫かれている。

脱力とめまい。

始祖は眠らない。力に満ちている。

代わりにぐったりとなって寝台に伏せる暁人の幼げな寝顔を傍らに横たわりながら眺めている。

その手が何故か暁人の頭の上におかれ、髪の毛を優しく撫でている。始祖の瞳は細められ、眉は困ったように顰められている。

暁人の好きな表情だった。

始祖は知っていた。

今はもう苦しみながら封じられている魂がよく作っていた表情だった。

始祖の中で彼は眠り、まだ苦しみ続けている。

みんなに操られ、いいように使われて今は虜囚だ。

可哀相に。

始祖は大した思い入れもなく心で呟く。

しかしそんなでも、暁人が慕っていた魂だから。

『おいで……』

昔から夢の中に現れる恐ろしい姿。

見たくない。けれど、それは手招き、彼が行かないと少しずつ近付いてきた。

『来ないで』

やがて、その姿は見上げるばかりに大きく、高く、そして彼のすぐ目の前まで迫っていた。

父親の様に大きなその腕がある夢の中で彼を高く抱き上げていた。

彼は逃れようと暴れたかったが身体がしびれて動けずにいた。

『見るが良い』

大きな存在が彼の後ろから言った。

下の方に闇が落ち、中央にスポットライトが当たっていた。

金髪の少女が人形のように虚ろに微笑んでいた。

首が後ろに傾き、その身体は脱力していた。

その壊れた人形を抱えている腕。その長い腕は……。

『やめる……!!』

彼は叫んだ。口がしびれていた。
彼を抱える大きな存在は言った。
『ああんりたくなければ……お前が強くなれ』

傷心を抱え、彼は2人に会った。
綺麗な少年達。

幼い方は白く輝いている様だった。
年長の方は彼より年上だった。

『僕は知っているよ』
年上の少年が彼に言った。

『怖いんだろう？』
『何の話？』

彼は年上の少年に問った。

『殺されたくないと思ってる』
『……！』

彼はその事は誰にも話した事はなかった。
『何の話』

年上の少年は微笑みながら言った。
『忘れさせてあげる。そして、僕の言う通りにすれば君は強くなれる』

年上の少年がさつと長い腕をのばした。
彼の額に手の平が置かれた。

『忘れさせてあげる』

あの日から抹消された事実は美しい兄弟と置き換わられた。
彼は何か大事な事を忘れ、大事な何かを取られた気がした。しかしそれが何かは
分からなかった。それも忘れてしまったのかも知れない。

兄弟の兄の方とは彼は割としょっちゅう語り合った。

その間無邪気な弟は1人で大人しく遊んでいた。

『ずっと前に』

兄の方の少年は語りだした。

『あの子が危険だと分かった』

1人遊びの少年の後ろ姿を兄は白い指で示した。整った爪はよく手入れされていた。

『危険って……？君の弟がかい？』

彼は冗談だと思って笑った。

兄の少年はいつもの穏やかな表情を浮かべたまま、

『だから……』

少年は彼に手の平を近付けた。額に触れる。

すると何か1つのシーンが見えた気がした。

ちいさな弟の肩をつかんで兄が尖った爪を食い込ませている。血が流れながらある図形が刻み込まれた。

まただ……昔の様に彼を抱き上げている長い腕。

いつもの様に落ち着いた声が囁く。

『ごらん』

その声が聞こえると、また見たくないものが表れるのだ。

『見たくない』

『見なくては』

後ろの声の持ち主の腕が彼の顎を支える。

彼は無理矢理顔をその方角へ向けさせられた。

暗い闇の中、またスポットライトだ。

『見たくない』

『見なくては』

そこに彼の親しくしている兄弟達の兄が立っていた。

兄は他の画像の人とは違い、彼を認識していた。

彼と目を合わせて、しかし顔のある方向へ向けた。

その先に今度はライトが当たった。

『……!!』

『嫌だ』

彼は目を塞いだ。

『見たくない!』

封じられた記憶が弾け飛ぶ錠の様にこじ開けられる。

置き換えていたのに。

兄弟の弟が泣き叫んでいた。

それはいつかの金髪の少女でもあった。

折られた首のように弟のプライドはずたずたにされ、

少年のプライドはへし折られた。

『やめてくれ。お願いだからやめてくれ』

彼は目を塞いだ。しかしその光景は内側から蘇った。

『ごらん』

腕の持ち主が言った。

兄弟の兄が風に髪を揺らして歩いている。

『悲しいかい』

少年が言った。彼を見ていない。しかしその台詞は彼に向けられていた。

『運めなのに』

『酷すぎる』

彼は叫んだ。

『じゃあ、こうしよう』

少年は彼を見てそして、暗闇に向かって手を振った。

少年の後方は森になっていた。その森から沢山の何かが飛び出していく。

前方にスポットライトが……。

男性がいた。その人目掛けて沢山の異形の者達が襲いかかった。

その大人は光る目をして異形をにらみつけた。

そして異形と対峙しようとしたが……。

少年が彼を振り返った。優しく笑っていた。

『こうしよつ』

兄の少年は綺麗な指先で前方を指した。稲妻があたりを引き裂いた。とたん、異形の者達が生贄にとびかかった……。

『聞ってるか』

『え』

目の前に端正な眼差し。

いつからだろう。違和感なくこの目を受け入れる様になったのは。

両親を亡くし2人きりで生きて来た兄弟の片方、常に保護されてきた弟を守って来た兄は

その庇護される者を見る時には優しく、愛情に満ち、その他に対する時には愛想よく

端正だったが薄い壁が張り巡らされていた。

彼のマンションに兄弟の兄と彼がコーヒーの香りと共にいた。

『感謝している』

青年は静かに海のような眼差しで落ち着いて言った。

『何の話だよ』

彼は慌てて答えた。

相手の青年はコーヒーを見、また彼に目を戻した。

間違いない自信に満ちた仕種だった。

『弟の事だ。いや……暁人の事だ』

青年はわざわざ名前に言い換えた。

『暁人？』

青年は軽く頷き、彼を見つめた。

『お前には心を許している。ずたずたに傷付いていたのに、またお前を見て笑う様になった』

彼は困った様に眉を動かした。暁人の兄、総一郎を優しい目で眺めた。

『俺は何もしてない。色々守ってやってるのはお前だろ』

『諒』

総一郎はじつと彼を見つめて言った。

『どうした、随分真剣だな』

『真剣な話なんだ』

『なんだよ？』

『もし……。暁人がお前を選んだら、その時はあいつを頼む』

『おい……。！』

彼は真剣な声を出した相手を咎めるように声を上げた。

『諒』

長い腕。中に暁人を抱いている。それは暁人ではないのかも知れない。しかし暁人になる
筈の魂。

長い尾の天使は優しい目で諒をみやった。

彼は天使を見上げる。

『始祖』

彼は今度は答えた。

『これは我が贅。成就の刻限の為に手配した予定された宴の為の供物。』

これがどんなに変化しようとも他の者に与えるわけにはゆかぬ』

彼は目を伏せた。

『分かっているつもりです』

『分かっているつもりだけど』

彼は言った。あの夢の様に。

真剣ないや、それ以上に必死ですらある目に対して。

『暁人は俺には過ぎた”贅”だ。彼はお前の物だよ、総一郎』

言われた方が途惑っている。

『どうして……。』

『俺は”始祖”に言われた事がある。暁人を横取りするなと』

総一郎は毒気を抜かれた様に彼を見つめた。

『なんだって』

彼は総一郎を見つめたまま言った。

『もしも、お前の言うようなその時が来たら。そしてお前に何かあるような事があつたら……その時は』

彼は総一郎とそして夢の中の始祖に向かって同時に語った。

『その時はこの身をお前にあけ渡すよ、総一郎』

『その時はこの身をあなたに還しましょう、始祖』

彼はなんの躊躇いも邪気もなくそう応じた。

暁人は零れる涙をそのままに赤い目をしたかつての従兄弟……そして恋人に抱えられていた。

恋人と同じ顔、身体、手足、声、そして匂い。なのに、違っている……それがとてつもなく切なかった。

始祖は最近、あの人の真似がすごく上手くなった。学校では彼の代わりを演じている。

時折暁人がどきつとするような表情すら浮かべる。始祖は彼の中に眠るあの人の記憶を

水面に映る影の様に、あるいは鏡に映る像のように眺める事ができるらしい。それで

彼の記憶や知識を少しずつ取り込んでいつているようだった。

『……っ』

『暁人、』

赤い目の恋人と同じ姿の存在は静かにあの人と同じ声で囁いた。
『……』

暁人は相手の目を黙って見つめる。

『構わないぞ、あいつの名を呼んでも。"俺"が返事をしよう』

暁人は震えた。その唇と顎を彼の指が支える。

「俺を呼んでくれ暁人。お前が望むなら俺はあいつになる」
暁人の目から新たな涙があふれた。

「諒……！」

「俺はここにいる」

彼の両腕が暁人を抱き寄せる。

温かい腕。暁人は相手の眼差しを見上げた。
そこには自分が映っていた。

(後書き)

救われない者は救いたいという
当たり前の願い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7181d/>

依童 / YORIWARA（セラフィム・スパイラル 諒×暁人）

2010年10月10日01時28分発行